

2025. 6. 29 (日) 使徒22:30～23:5

22:30 翌日、千人隊長は、パウロがなぜユダヤ人たちに訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を解いた。そして、祭司長たちと最高法院全体に集まるように命じ、パウロを連れて行って、彼らの前に立たせた。

23:1 パウロは、最高法院の人々を見つめて言った。「兄弟たち。私は今日まで、あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました。」

23:2 すると、大祭司アナニアは、パウロのそばに立っていた者たちに、彼の口を打つように命じた。

23:3 そこで、パウロはアナニアに向かって言った。「白く塗った壁よ、神があなたを打たれる。あなたは、律法にしたがって私をさばく座に着いていながら、律法に背いて私を打てと命じるのか。」

23:4 すると、そばに立っていた者たちが「あなたは神の大祭司をののしるのか」と言ったので、

23:5 パウロは答えた。「兄弟たち。私は彼が大祭司だとは知らなかった。確かに、『あなたの民の指導者を悪く言ってはならない』と書かれています。」

<説教>

前回の「使徒の働き」からの説教は3月2日でした。本日はその続き、22章30節からです。結構間が空いてしまったので、少し振り返ってみます。

使徒パウロは第3回伝道旅行を終えてエルサレムに到着しました(21:17)。するとそこではパウロがモーセの律法に背く教えをしているという噂がユダヤ人キリスト者の間に広まっているということが分かりました。それでパウロは彼らを躓かせないために神殿に行き、ユダヤ人のきよめの儀式に参加しました(26)。その儀式の期間が終わろうとしていた時に、アジアから来たユダヤ人たち（彼らはパウロに敵対していた）が、パウロは律法違反の教えをしており、神殿を汚していると言って群衆を扇動してパウロを捕らえました(27-29)。エルサレムは大騒ぎの混乱状態となり、パウロが神殿の外に引きずり出されて殺されようとしていたとき、報告を受けたローマ軍の千人隊長が来てパウロの身を確保しました(30-33)。千人隊長はパウロが何者で、何をしたのか群衆に尋ねましたが、騒がしく、確かなことが分からなかったのでパウロを兵営に連れて行こうとしました。その間も群衆は「殺してしまえ」と叫びながらついて来たのでした(33-36)。パウロは兵営に連れ込まれる直前に、千人隊長の許可を得て、兵営に続く階段の上に立ち、ヘブル語でユダヤ人群衆に語りかけました(37-40)。

22章1～21節にパウロのことが記されていました。彼は自分がどのようにしてイエスをキリストだと信じるようにされたか、そしてどのようにしてイエスの証人として召されたのかを語りました。神に対して熱心な自分が、それ故にキリスト者たちを迫害し、ひいてはイエスご自身を迫害しているということをダマスコ途上で復活のイエスから直接示されたこと。ダマスコで、律法に従う敬虔なユダヤ人アナニアの話を聞き、自分がイエス・キリストの証人になるよう選ばれ召されたことを知り、イエスの名を呼んでバプテスマを受け、罪を洗い流されてキリスト者となったこと。その後エルサレムに帰って神殿で祈

っていたときに主イエスが現れ、イエスについてパウロが語る証をエルサレムの人々は受け入れないのでエルサレムを離れるようにお命じになり、パウロを異邦人にお遣わしになると言われたこと。これらのことをパウロは語り証しました。それは、ユダヤ人たちが嫉み拒み十字架につけて殺し、しかし復活なされたナザレのイエスをキリストとして信じ受け入れない限りは、ユダヤ教徒としてどれだけ熱心に律法を守り行っていたとしても、それは罪でしかないということでした。そしてその罪をユダヤ人たちが認めず悔い改めもしないので、自分はイエスの命令によって異邦人の方に行く、ということでした。

そう言うパウロの証、説教を聞いた人々は、それ以上パウロの話を聞くことに耐えきれず、「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない。」と声を張り上げ、再び大騒ぎとなりました(22:22-23)。こうしてユダヤ人たちはパウロが宣べ伝えているイエス・キリストをどこまでも拒絶しました。それはイエス・キリストをこの世にお遣わしになった神をも拒絶したということでした。

さて、千人隊長はそういう霊的なことは分からなかったようですが、ローマの権力の一員として治安維持という自分の務めを果たそうとしました。ユダヤ人たちの騒ぎの理由を知るためにパウロの取り調べにかかります(24)。そこでパウロが「生まれながらのローマ市民」だと知り、パウロの取り扱いについて一層慎重になったようです(25-29)。

それで千人隊長はユダヤ人最高法院に命じてパウロの取り調べ、裁判をさせることにしました(30)。最高法院は当時ローマの支配下にありつつ、ユダヤ人の政治的、司法的、そして宗教的な問題を取り扱う機関でした。

最高法院の人々の前に連れて行かれたパウロは彼らを見つめ、語りました(1)。彼はこの最高法院の場でも恐れもせず、穏やかで落ち着いていました。その態度と言葉には余裕さえ感じられます。どちらが取り調べられ、裁かれるれているのか、立場が逆転しているようですし、すぐ後で分かるように、実際そうでした。パウロは自分をさばく立場にある人々に向かって「兄弟たち」と言い、彼らと自分を「同列」においています。そして「私は今日まで、あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました。」と証言しました。彼はいつも人に向かって語り、教え、人の前で行動していながら、それ以上に神の前に自分は立たされていることを自覚していました。自分は今ここで最高法院という人間の法廷に立たされているけれども、実は〈兄弟たち〉と自分は一緒に神の法廷に立っているのだと弁えていました。〈健全な良心〉とはイエスを信じる信仰による良心、みことばと聖霊に教えられ導かれ従う良心です。すぐ前に証したようにイエスに出会い、イエスを信じたとき以来〈今日まで〉そして今このときも「私はあくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました。」と証言しました。

このパウロのことばと態度を、議長・裁判長である〈大祭司アナニア〉は、議会の権威を無視した不遜な態度と決めつけ、腹を立て、即パウロを罰するように命じました(2)。しかしパウロはアナニアがよく調べもせず、また罪が確定してもいないのに罰することは律法違反(cf.申命記 19:15)だと指摘しました。内実はそんな危うい不正な議長のくせに外面は権力と正義漢づらで塗りたくられている。あなたはそんな〈白く塗った壁〉であり、神のさばきは免れないと逆に宣告しました(3)。それで、そばに立っていた者たちがパウロを咎めると(4)、彼は更に臆することなく答えました(5)。このパウロの答えにあるパウロの思いについては色々な解釈がありますが、私はこんなことではないかと思います。『あ

あなたの民の指導者を悪く言ってはならない』と書かれています。とは、「あなたの民の族長をのろってはならない」(出エジプト記 22:28)のことです。しかしそれはすぐ前の「あなたの神をののしってはならない」というみことばに続く(または並行する)ものです。つまり民の族長は神がお立てになった者なのだから、民の族長をのろうことは彼をお立てになった神をののしることになるということです。そしてそのことから、ならば民の族長は、神によって立てられた者に相応しく、誰よりも神を恐れ、神に従い、情け深く、あわれみと義を行わなければならない(cf.同 22:21-27)ということになります。なのに、このアナニアときたら、進んで律法違反を犯して恥じるところがない。更にはどうやら彼は不正な方法でこの地位を手に入れたそうなので、なおさら、彼が大祭司だとは信じがたい。もちろん彼が大祭司だとは知っていたが、「知らなかった」と言ってやりたいほどだ。そういわば皮肉を言ったようなものです。

このように、今たった一人で多くの敵対者に囲まれても、〈あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きて〉いたパウロの態度に倣いたいと思います。今までも、今も、人の前、人の法廷にいるように見えて、実は神の前、神の法廷にいるのだという自覚です。どんな問題、議論であれ、殊に主イエスに反対敵対する者たちに向かってイエスを証しし、「一緒に神の最終審判の座に出ようではないか」と言うことのできる信仰です。